服部浩之准教授

(アートマネジメント/キュレーション)

~共同/協働のプラットフォームを~

建築から現代アートへ

風景を見ることが好きで、大学は建築の設計を 学べるところを選びました。学生時代は、六本木 や丸の内の再開発が行われていましたが、こうい う大規模再開発に直接加担するような仕事はした くないと思いました。そもそも僕が興味を持って いたのは、建築計画などで意図された部分から外 れた隙間や、開発に取り残された余白など、とる にたらない風景だったんです。そんなことを思っ いるときに、書籍などで知った赤瀬川原平さんや 路上観察学会の活動は、とても魅力的に感じまし た。ユーモアと遊びの感覚を持って、すでにある ものを再発見し、全く別の価値を与えてしまうこ とに衝撃をうけました。これをきっかけに現代ア ートに大きな興味を抱き、結果的にアートセンタ ーで学芸員として働くようになりました。

わかりやすさという罠

最初は山口県の秋吉台国際芸術村で働きました。国内外様々なアーティストと新しいプロジェクトを実現することは刺激的でした。県立の公共

施設だったこともあり、とにかく「みんなにわかりやすいプログラムを組みなさい」と言われ続け、「わかりやすさとはなんだろう」という疑問を持ち続けていました。アーティストは、わからないことがあるからこそ、それを他者と共有し探求するメディアとしても作品を創出する側面があるでしょう。ですので、それらの作品は本質的には簡単にわかった気になれるようなものではないと思うんです。その「わからなさ」をみんなと考えることや、それを楽しむ場のほうが公共的な価値があるのではと考えるようになりました。以来、公共性についてずっと考え続けています。

プライベートでパブリックな半公共空

そんな頃、山口情報芸術センターの同世代の人達と仲良くなり、共同で一軒家を借りて住むことになりました。のちに Maemachi Art Center (MAC)と呼ばれる場所で、アートと都市の関係や

てプロジェクトも行ったりもしました。公共施設

諸問題を探求する絶好の場となり、助成金を取っ



でワークショップをやるとなかなか人が集まらないのに、一軒家でアーティストを囲む飲み会をやると瞬時に人が集まるという経験をし、やっていることはあまり差がなくても、「言い方や場の設定で人の心持ちや距離感が変わる」ことを経験し、場作りに関心をもち、プライベートとパブリックが融合する半公共空間を探求するようになりました。

海外の人々と共同で展覧会を築く

ここ5年はアジアの同世代の人と一緒に仕事をする機会が多くなってきました。2012年から2014年まで3年をかけて、国際交流基金主催による日本と東南アジアのメディア・アートを紹介する展覧会「MEDIA/ART KITCHEN」にキュレーターとして関わりました。東南アジア6カ国と日本から背景や専門性が異なる現代アートに携わる13名がキュレーターとして集められ、4都市で開催される展覧会をつくりました。東南アジアで現地リサーチすると、国や地域によってアートを取り巻く状況が全く異なることが分かりました。



美術館などが整っている国もあれば、オルタナティブスペースやアーティスト主導の場ばかりの国もある。そんな現状を踏まえ、ひとつの展覧会を単純に4都市で巡回させるというのは不可能だと考え、「MEDIA/ART KITCHEN」というメインタイトルだけは共通にして、各国で全く異なるサブテーマを持った別々の展覧会を実現しました。唯一の共通言語である英語を駆使し、ときにそれぞれの母国語も交えながらみんなでコンセプトを組み立てる作業は、困難も多かったですが、非常に知的な刺激に満ちた経験でした。

東南アジアでは美術館インフラの整備が遅れているなどマイナスの面も沢山あるのですが、そんな不足を意に介さず、ないものは自分たちで作ってしまう彼らの態度やマルチな能力には、本当に学ぶことが多かったです。

芸術祭の余白を活用する

今年 10 月末までは、あいちトリエンナーレに キュレーターとして関わってきました。テーマは 「虹のキャラバンサライ〜創造する人間の旅」。 あいちトリエンナーレは、県外から1泊2日など で訪れる人も多いのですが、一方で地元に暮らし ボランティアで関わったり、何度も展覧会やイベ ントに通うリピーターも多く、実は多様な観客層 がいます。そういう地域の人が積極的に参加でき るプラットフォームを築きたいと思い、参加型や プロセスベースのプロジェクトをいくつか展開し ました。これらは、展覧会として簡単に成果が見 える、わかりやすいものではありませんでした。



しかし、鑑賞するのみの体験に留まってしまうことが多い芸術祭において、より多様な関わりができる余白をつくり、アーティストや観客、スタッフがフラットに交わる解放区を築く試みとしては有効に機能したと思います。

同じように、大学も制度のもとで与えられる場として捉えてしまうと得るものは少ないと思います。より積極的に、この学びの場をハッキングするくらいの感覚で参加してくれる人が一人でも増えるような、オルタナティブなプラットフォームを生み出していきたいと考えています。